提出日：令和　３　年　２　月　２８　日
所　属：生命・環境科学部 食品生命科学科
氏　名：守 口　　徹　職位：　教 授

I　ティーチング・ポートフォリオ

１．教育の責任（教育活動の範囲）

・食品生命科学科の中で実習を含む担当科目は，生きるために基本的で必須知識として習得させ，自分の食を自分で選択する判断力を身につけさせることを第一義としている． 年次を重ねるしたがって，その専門性を高め，広く論理的に説明できることを目標にし，最終的には，これらを社会で実践できる人材を輩出する．

科目名	学科・専攻	必,選,自	配当年次	受講者数
食生活と健康科学	食品生命科学科	必修	1 年前期	約 90 名
栄養学	食品生命科学科	必修	1 年後期	約 90 名
栄養学実習	食品生命科学科	必修	2 年前期	約 90 名
食品機能学	食品生命科学科	選択	3 年前期	約 80 名
卒業論文	食品生命科学科	選択	3 年，4 年通年	17 名
食品健康科学特別演習Ⅰ	環境保健学研究科		1 年通年/1 年通年	
食品健康科学特別演習Ⅱ	環境保健学研究科		2 年前期/2 年通年	
食品健康科学特別実験Ⅰ	環境保健学研究科		1 年通年/1 年通年	
食品健康科学特別実験Ⅱ	環境保健学研究科		2 年通年/2 年通年	
食品健康科学特別実験Ⅲ	環境保健学研究科		― /3 年通年	
科学者・研究者論	環境保健学研究科			

２．教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）

1. 初年度には，食生活が影響する疾患（生活習慣病）の特徴を知り，食を学ぶ上で必要かつ日常的に使用するキーワードを改めて理解させ，健康に対する食の重要性を認識させるとともに問題意識を持つ習慣をつけさせる． また，栄養素の特徴とその代謝について学び，生物が生命を維持するための食の知識の充実を図る．
2. 次年度には，ヒトや生体試料，実験動物を使った実験を実施して，実験に必要な試薬の量，器具の種類と数量を考え，試験結果を提示して食に関わる生理現象を論理的に考察させる．
3. 3 年次では，食の知識をより深めるために，健康維持における多種類の食品の第三次機能を理解し，科学的根拠に基づいた身近な食品成分の機能性を見極める能力を身につけさせる．

3.　教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

・「食」は，生命を営む最低限かつ必須であるものの，その食事内容の偏りによって疾患リスクを高めることも，疾患予防にもなりうる． それらを正しく理解し，説明できることを実践するために，以下のアプローチを実施する．
1. 食生活が影響する疾患（肥満，高血圧，糖尿病，がんなどの生活習慣病）の特徴を知り，これらを学ぶ上で必要かつ日常的に使用するキーワードを改めて理解する．
2. 自分自身の食生活を振り返って，健康に対する食の重要性を再認識させるとともに，何処

に問題があるのかを意識する習慣をつける.

3. 生理学的知識を背景に身体に吸収される栄養素の特徴とその代謝について理解し，生物が健康を維持するための，栄養素の役割やバランスなど食の知識の充実を図る.
4. ヒトや生体試料，実験動物を使った実験を実施（本年度はシミュレーションのみ）して，実験に必要な試薬の量，器具の種類と数量を考え，試験結果を提示して，食に関わる生理現象を論理的に考察させる.
   → 将来の研究活動を見据えて，実践的なシミュレーションの機会を持ち，思考力を高め，結果考察まで展開させる.
   → グループ分けは，極力，他実習でも経験したことのない学生で構成するように工夫する.
5. 食の知識をより深めるために，健康維持における多種の食品の第三次機能を理解し，科学的根拠に基づいた身近な食品成分の機能性を見極める能力を身につける.
   → 各研究室員での構成するグループが，自分たちが選んだ素材について調査し発表する.
   → 発表は，卒業論文の研究活動を想定して，卒論発表レベルを目標にする.

<u>アクティブラーニングについての取組</u>

・食品機能学において，対面授業でも行っていた小グループによる機能性素材の調査とプレゼンテーションを実施し，学生同士，学生教員間で科学的根拠を検証・考察する機会を作った.

<u>ICT の教育への活用</u>

・オンデマンド授業資料の作成，小テスト，オンライン授業を行い，基本的な活用が可能となった.

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

<u>①教育（授業，実習）の創意工夫（A）</u>
<u>②学生の理解度の把握（B）</u>
<u>③学生の自学自習を促すための工夫（B）</u>
<u>④学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（B）</u>
<u>⑤双方向授業への工夫（B）</u>
<u>※A（十分実施している）B（実施しているが十分でない）C（うまく取り組めていない）</u>

上記を鑑みて現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

・本年度は，遠隔授業が主となったために，遠隔授業用に対面授業のテキストに解説文を加えて配布したが，理解が得やすいと好感触であったので引き続き行いたい．また，受講態度の確認はできなかったが，授業後に少テストを実施し，復習時間の確保に努めた.
・実習に関しては，集中であったために授業評価の機会を逸してしまったが，実習最終日の感想文では，実験はできなくとも実験準備，操作を個々に考え，提示した結果を座学授業で得られた知識で考察することで，実験の心構えができた評価をもらったので，継続したい.
・授業に対して積極に取り組む学生，刺激を受けると動き出す学生については，さらにステップを上げて対応する計画があるが，出席が満たされず，本分を忘れた消極的な学生については，その対応に苦慮している.

5.学生授業評価
①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。 ②①の結果はどうでしたか。 ③②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。 ・遠隔授業用に，対面授業のテキストに解説文を加えて配布したが，理解が得やすいと好感触であったので引き続き行いたい. ・本年度は，遠隔授業が主となったために受講態度の確認はできなかったが，授業後に少テストを実施し，復習時間の確保に努めた. ・実習に関しては，集中で行うために授業評価の機会を逸してしまったが，実習最終日の感想文では，実験はできなくとも実験準備，操作を個々に考え，提示した結果を座学授業で得られた知識で考察することで，実験の心構えができた評価をもらったので，継続したいと考えている.
6.学生の学修成果
1　学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。 ・授業中の指名による簡単な問いを行い，教員－学生の双方授業を重要視しているが，その問いの内容を「知っているもの」から「考えるもの」に変えていきたい. ・遠隔実習で得られた教訓として，対面実習でのグループ，学生同士に頼らず，個々の学習・思考姿勢を伸ばせば，成績も向上できると考えている. ②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価
7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況） ・特になし
8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン） ・短期的目標として，アクティブラーニングの授業ソースを増やしたい.
9. 添付資料（根拠資料）（※ 資料名のみ